

馬里邑れい著「身代金 - 戦慄の誘拐 - 」現代書館 2009年5月10日刊を読む

「感謝しなければ……」

原田は思った。

これからは、以前よりもっともっと、多くの事に感謝しながら、父のように素朴に生きていこう。

幸せというものは、とても素朴なところに在るものなのだ……。

九年間のアメリカ暮らしに不自由を感じることはなかったが、海外に渡り、初めてわかる日本のよさも多かった。四季のある自然に恵まれ、侘び寂のわかる日本はすばらしい。

海に囲まれた国は、安全面でもケタ違いだ。

水がどこでも飲める環境もありがたい。

原田は日本に着くまで、飛行機の窓から幾度も空を見た。

大空は、原田を包み込むように美しい。

生きて帰ってきた……。

原田はゆっくりと目を閉じてみた。

ここは窓のない部屋ではない。両手も両足も繋がれていない。銃で脅す者もいない。

もう自由の身なのだ。こんどはそっと目を開けて見る。

布袋を被せられていない目は、しっかりと大空を映している。

生きて帰って来れたのだ……。

もう一度生きられる……。

自由であることを嘔みしめながら、原田はようやく深い眠りに落ちていった。

P.223 ~ P.224

[コメント]

1996年に南カリフォルニアのサンディエゴに近いメキシコで発生した邦人誘拐事件をテーマにしたノンフィクションに近い小説。著者の馬里邑先生の叔父にあたる方が事件の被害者であったために緻密な取材に基づく。海外で活躍する日本人、必読の書。

- 2009年6月9日林明夫記 -